

新

小さな橋を見つける

連載

①

感動の瞬間

本誌編集委員 植野 芳彦



はじめに

我が国の社会資本の整備はこれまで高度成長という時代の流れの中で、様々な社会資本が整備され、人々に安全安心な社会と経済発展の基盤として活用されてきました。しかし、バブルが崩壊し、経済が成長期から成熟期へと向かう中、財政難が叫ばれ、公共事業は悪者呼ばわりされ、税金の「無駄使い」の元凶のようにマスコミ等で報じられています。

これまで、我々技術者は、技術の発展と挑戦心から、できるだけ大きなものを作るのが夢でした。学生時代に、黒部ダムや青函トンネル、本州四国連絡橋等のビッグプロジェクトにあこがれ、この世界に入った方々も大勢いらっしやることと思います。

本来社会資本の整備は、国家戦略的に整備されていくものと考えますが、時代の要求により、変化していくものでもあると思います。時代の流れには、到底、逆らうことはできません。「重厚長大」から「軽薄短小」へ、「実」から「虚」がもてはやされるようになってしまいました。しかし、社会資本整備が「無駄の元凶」のように、国民の多くから思われているのは、非常に残念でなりません。せめて、この点だけでも、考え直していただければと考え、今回から数回にわたり、身近な「小さな橋」とそれにまつわるエピソードなどを、私の、つたない経験の中からお伝えしていきたいと思ひます。

近代木橋

まず、第1回目の今回は、ある木橋のお話です。はじめに、木橋に関して概略を述べます。詳しい話は、それぞれの専門書に譲ります。

たとえば山口の錦帯橋は、世界最高水準の木橋であるとの評価を得ています。我が国には、その昔「木の文化」と言われるものがあり、我々の生活に密着して、木材が使用されてきました。しかし、高度成長の流れとともに鋼やコンクリートの新材料に取って代われ、様々なものが木を使わなくなってしまいました。特に、社会資本である橋は交通量の増加、河川改修の影響等により、丈夫な鋼やコンクリートに変わり「永久橋」と言われるものに架け替えられていきました。一度途絶えた木橋が20年ほど前から復活してきています。この復活は、人々の「環境意識の高まり」「日本的風景への回帰」「やさしさ・ぬくもりを求める気持ち」があると考えられます。しかし、材料が劣化（腐朽）しやすいため、寿命が短いという欠点があります。さらに、自然素材が材料であるために、材料の均質化が困難であり、大規模な構造物を建造するにも困難がありました。「近代木橋」の最大の特徴は、旧来の木橋は、丸太や製材を組み合わせて造られてきましたが、集成材というものを使用しています。集成材技術の発展に伴い、工業生産化され、材料としての均一性が確保される、「木

質材料」を構造部材に採用した構造物であります。

私は、一応、鋼構造が専門であると思っております。平成6年に、国土交通省の木橋技術基準の関連業務にかかわってから木橋に係っています。そんな中で、木橋というものも、今後の日本のためには残しておかなければならない構造物であり、技術であると強く感じております。なぜかと言いますと、

■視点1：環境問題の救世主

近年、地球温暖化問題の深刻化もあり、二酸化炭素の排出問題への関心は国民的に高まっています。地球環境の問題は、ここ20年間で急激に悪化しているそうです。このまま放置すると、さらに今後20年間で飛躍的に悪化すると言われています。「21世紀は環境の世紀」とも、言われている中で、木橋等の木造構造物の建設が促進されることにより、国内資源が有効に活用されるだけでなく、間伐による森林の管理・保全が推進され、生態系の保全や、自然災害の軽減など森林が有する多面的機能が十分に発揮されることが期待されるのではないのでしょうか。木質材料を構造物に利用することは、二酸化炭素の固定化を促進し、都市の中に森林を創ることに等しいのです。つまり、二酸化炭素の削減効果に寄与できるわけであります。我が国の社会資本の形成を環境問題と複合的に考えると、木材の有効活用が一方策であると期待できるのではないのでしょうか。「木橋を造ることは、環境にやさしい構造物を造ることである。」と自信を持って言えないだろうかと思っています。

■視点2：観光立国の要

昨今「観光立国」、観光産業の活性化が日本の活力を復活させる起爆剤となることが期待されています。観光客を日本に呼ぶためにはどうすればよいのか？それは、欧米のマネをした風景デザインが彼らを喜ばせるのではないかと考えます。「日本的風土」が彼らの期待を満足させる素材となるわけであります。日本的風土とは何か？これは意外とその中で生活している我々には気づきづらいことかもしれませんが、おそらく、「精神的」のものであろうと考えます。神社やお城などの日本建築とそれらが創り出す、風景、町

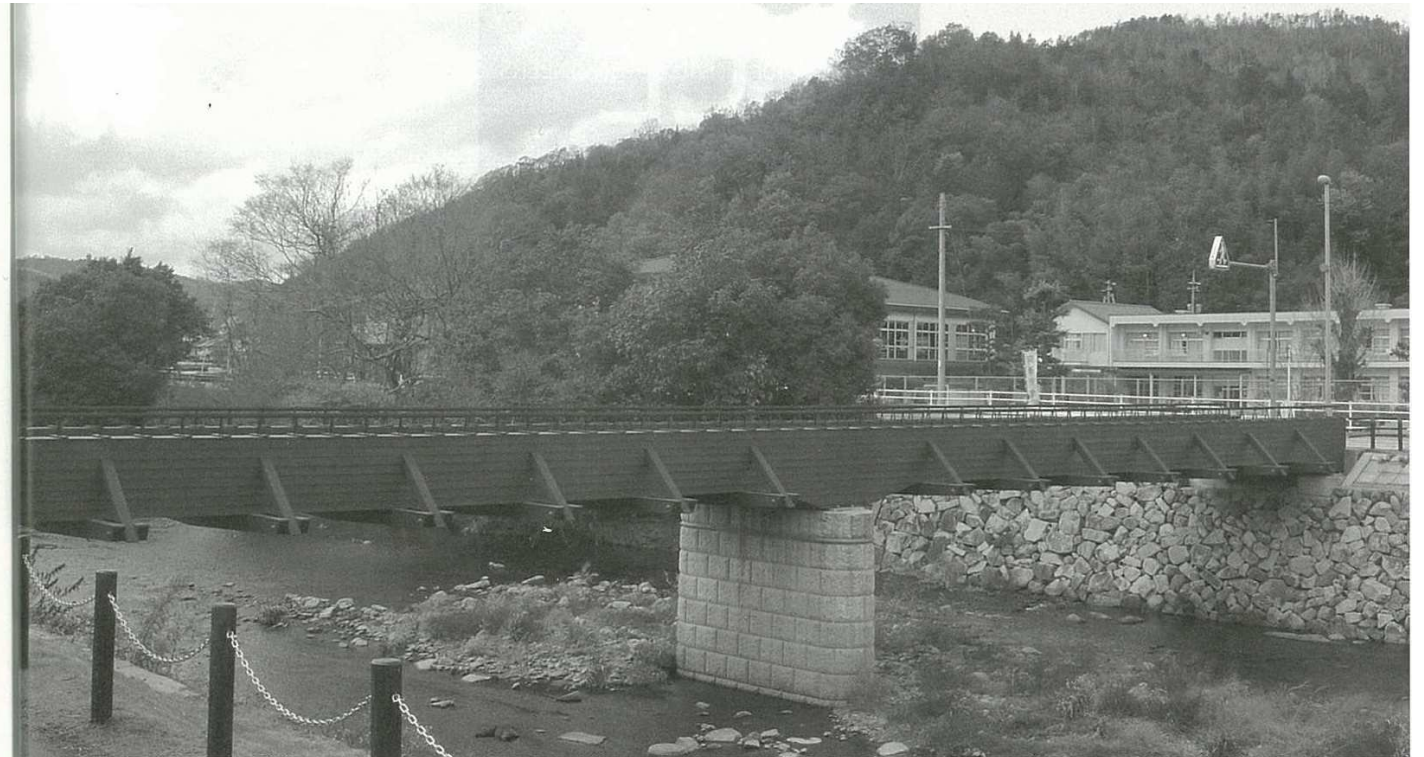
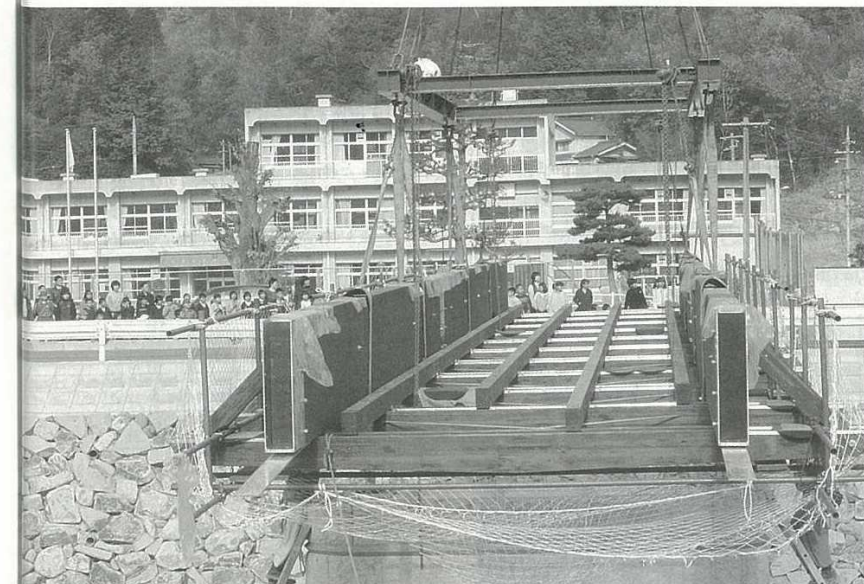


写真1
いきいき橋の完成

並みも必要ではありませんが、精神文化、つまり表現が難しいですが、「侘び寂び」や「武士道」を感じさせる空間ではないでしょうか。西洋の石が中心の、長年の風雪に耐え忍ぶ強固なイメージとは、対照的に、日本の木材中心の建造物とその精神。「いずれは朽ち果てる。」そこに日本の精神文化があるのではないのでしょうか？ 経年変化とともに色落ちていく姿は、「侘び寂び」の世界であり、数十年で

写真2
“感動の瞬間”
いきいき橋の架設を見学する小学生たち



朽ち果て架け替えられ、世代を後世に譲る“潔さ”は、まさに武士道の世界に通ずるものです。木造構造物はまさに、日本の精神文化までを具現化したものといえるのではないだろうか（というのはいきいき橋でいいのでしょうか？）。

やさしい橋

国土交通省の木橋の技術基準検討委員会の中で、実際にモデル木橋というのを5橋建設しました。その中で「いきいき橋」（尾道市の木橋）の架設時のエピソードから、心に残った話を紹介します。（以下、場面を想像してみてください）

自分たちの小学校の前に架設される木橋を見学する小学生たちが息を呑んで見つめている。

（職人さんたちはいつになく真剣だった…）

「小学生のギャラリイに見守られて橋を架けて、こんなに緊張して、感激したことはない。」と…照れくさそうだった。

橋台と橋脚の空間に、見事に橋が架け渡されると、自然に小学生たちから、大きな拍手が起きた！

（架ける人、見守る人、共に感激した瞬間だった！）

「やっぱり、橋はイナ～！必要なんだよ！人々にとって本当は！」

（誰だ、橋はもう要らないと言っているのは！）

確かに、ただ、巨大なものを造って喜んでいても、それは意味が無い。本当に皆が使って喜んでくれるものを造ってこそである。そうすれば、使ってくれる人たちも、何とか長持ちさせようとするだろう。“自分達の橋”として大切にしてくれるだろう！

私が社会に出て間際のころ、小学校の前の国道に歩道橋を架けた。何年か経って、そこを通ると、小学生達が、掃帚を持って掃除をしていた。そのときの感激を思い出した。（ありがとう！）

きっと、この橋もそうなるだろう！！